

「地域の諸問題を対象とした設計・制作活動」

主催 日本建築学会北陸支部

参加学生、参加ディスカッサー、シンポジオン世話人

1. はじめに

支部企画としてすっかり定着した標記シンポジオンは、今回で5回目(5年目)をむかえました。学生諸君はいうにおよばず、建築人(大人)にとっても、刺激的な知的交流の場としてシンポジオンへの期待は大きくなっています。こうした期待に答えて、参加学生チームはここ数年増えつづけ、リピーターチームもみられるようになりました。また、今年は学生が司会を務め運営するという文字通りの「学生による」シンポジオンが実現しました。こうした学生の熱気あふれる交流を報告します。

学生諸君への参加呼びかけ文

学生の皆さんは、設計や制作活動として題材を地域における諸問題に求め、学校の授業の一環としてあるいは地域活動として、街づくり、住まいづくり、家具作り、室内環境設計、構造設計などに積極的に取り組んでおられることと思います。こうした取り組みによる成果や作品は、当然のことながらそれぞれ地域的な特徴のあるものとなっております。そこで、本シンポジウムにおいて、こうした問題に取り組んでいる学生が一堂に会して、お互いに主張しあい、若者らしい探究心を研ぎ澄まして、地域横並びで、問題設定や問題解決について奥深く展開いたしましょう。

2. 開催概要

日時：7月12日(日)13:00-15:30(最大延長16:00)

会場：富山大学(五福キャンパス)共通教育棟2階第9番教室

話題提供学生：8チーム

実施タイムテーブル

- 13:00-13:10 主旨説明、進行の説明
 - 13:10-14:30 各チームの発表 8分程、計8チーム
 - 14:30-15:00 語り合い
 - 15:00-15:25 語り合い後の感想、3分/チーム
 - 15:25-15:30 まとめ話題提供学生
- 司会：加藤祐衣、瀬戸真理子(共に富山大学)

チームとテーマ(エントリー順、敬称略)

1：富山大学aチーム

「技術デザインプロジェクト」；

伊藤あかね、竹内友子、石黒綾、酒井克弥

概要：壁や柱が凹んだり、飛び出たりすることで寄りかかれる場所を創り出す案や、ベンチやサインを大仏をモチーフとしてデザインした案など、高岡の地場産業の技術を活かしたストリートファニチャーの提案をしました。

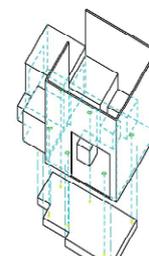
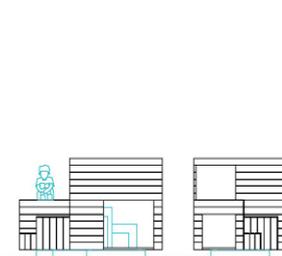


2：富山大学bチーム

「迷キューブプロジェクト」

根塚陽己 加藤智子、南大輔、磯部陵

概要：富山県の間伐材を用いて、大きさの異なる立方体を入れ子にしたり付加したりすることで、幼稚園児の遊び心を刺激する遊具を、自ら設計・施工しました。



3：富山建築デザインチーム

「富山駅北の文化ネットワーク」

片山成実、加藤三英子、鷹田健人、刃根愛子
松井渉、山岡俊宏

概要：富山駅北口地区に、文化をキーワードとしてネットワークを構成することを目的としました。実際には、点在する小さな敷地に、街中図書館や児童館などを設計し、富山駅北地区の活性化について提案しました。

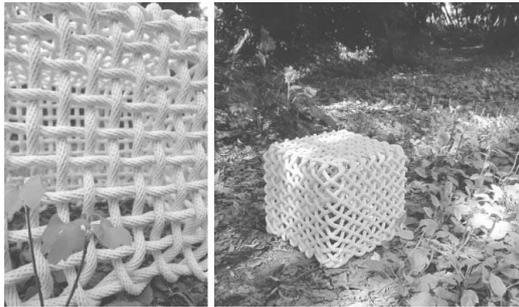


4：福井大学チーム

「雑木林×屋台プロジェクト」

石原周太郎、住田薫、吉村優、池田早苗 他

概要：編み込んだ紐をポリエステル樹脂で強固にすることで椅子を、型に嵌めたガラス繊維をポリエステル樹脂で強固にすることで出来る机を自ら設計・施工しました。



5：福井工大 a チーム

「北信越地方における地震時の揺れの違い」

井口翔太、岡田倫明、岡崎汐里、寺本翔史、
中川泰一、森下儀一

概要：新潟中越沖地震時の揺れとこの地震波を最大速度 50cm/s(大地震相当)、100cm/s(阪神淡路大震災クラス)にした時の3つの波を北信越各県で解析し「北信越地方に 福井市における地震時の揺れの違い」として検証しました。

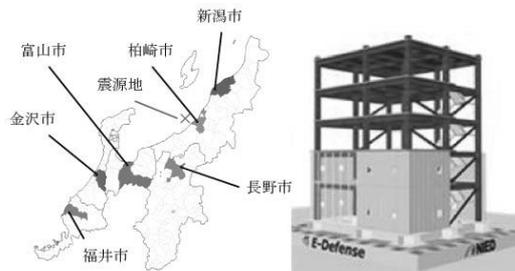


図1 解析対象の地域

図2 モデル²⁾

6：福井工大 b チーム

「公営スポーツ施設建替によるコミュニティの再生計画」

齊藤俊道、三申一樹、古谷昌也、福頼直樹

概要：福井市営三秀プール（三秀園跡地）を実際に建替えることを想定して、実用性と機能性を重視すると共に、地域環境の改善を視野にいれた「スポーツクラブを有するコミュニティ施設」を計画しました。



7：金沢工大 a チーム

「今後衰退が予測される寺院において、住民の新たなコ

ミュニティや地域性を創出できるような場をつくる」

3年 中川達心(代表)、宮里宜雅、崔恭輔、石月亜希子

2年 成見大介、源石和真、菅原英哲、近藤秀一郎、

大桃諒介 1年 宮下晃一、金泰亨

概要：宗教が生活と密接に関わっていた過去の寺院・神社の役割を現代生活の中に変換し、地域住民の関係を密にできるような空間を提案することを通して、「新たな空間の創造」として表現することに挑戦しました。

8：金沢工大 b チーム

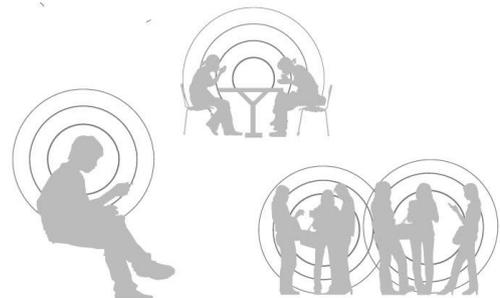
「地域の特徴を金沢から発信する」

3年 平野周(代表)、高橋亘、山本亜紀子

2年 大村周平、吉本陽広、今井香織、奥田沙里、

小笠原玄貴

概要：情報収集源が インターネットやテレビに依存してくることで失われた地域のネットワークを取り戻すために「地域の人たちが情報の交換・共有ができる場」を創出しました。



9：金沢工大 c チーム

「海洋建築で新しいコミュニティの形成」

2年 千田可奈子(代表)、渡辺良典、田中成樹、橋本智

明、鎌仲諒、木山真理子、横間奈菜世、渡辺哲志、

横山祐樹、1年 高岡珠希

概要：人々にストレスを感じさせる現代の都市空間に『ゆとり』や『やすらぎ』を与えるため、五感に安心感ややすらぎを与える水の性質を生かしたリフレッシュ空間を提案しました。

3. 参加学生のコメント

参加した学生から寄せられた多くのコメントのうちいくつかを紹介します。



司会の学生



会場風景

(1) 学生のシンポジオンは同世代の学生が共通点を持ったプロジェクトについて話しあうとても刺激的なものだったと思います。どのチームも情熱を持って、自分たちの周りの環境について考えている点がとても印象的でした。地域に関係するという点は共通しているながら、その規模やアプローチの方法は様々で今後の参考にもなりました。とくに、身近な森に対して空間にいろどりを与えるデザインを行っていた福井大学のプロジェクトはとても繊細な作品で魅力的でした。富山大学のプロジェクトもストリートファニチャーというテーマだったので、比較しながら作品を見させていただきました。学科やコースを越えた仲間たちで、自分たちを取り巻く地域に対してデザインをしていくことは学生だからこそできるのではないかと思います。富山大学では今年も、今回発表したデザインプロジェクトを継続して行きます。今回の体験を活かし、より活発に今後のデザイン活動を行っていききたいと思います。(by 伊藤あかね)



富山大学a
チームの
語り合い

(2) 学生による語り合いのシンポジオンは、建築学会北陸支部大会の中で学生が主体となって開く会です。同じ地域に住みながら普段は離れた場所で活動をしている学生が、年に一度集ま

り「地域の諸問題を対象とした設計・制作活動」というテーマでそれぞれの活動を発表します。また、このシンポジオンでは、学生同士の活発な交流も目的のひとつなので、発表形式も発表者と聞く側との距離が近く、発表後には語り合いの時間が設けられていることも大きな特徴です。今年は昨年度より参加数も増え、5つの大学・専門学校から9つのチームが発表しました。さらに、新しい試みとして、学生が司会進行を進めたことも印象的でした。

学外で発表するという体験は自分の経験値を上げ、他の学校の発表を聞くという体験は自分の世界を広げることができます。また、この会の大きなテーマである「語り合い」の時間は個々の作品を制作者と話をしながらじっくりと見たり、自分の作品についての率直な意見を聞くことができます。ここでは他大学の学生や先生方と、かしまることなく自由に和気あいあいとした雰囲気のなかで意見交換ができます。様々な方に自分の作品を見て頂くと、自分では気付かなかった点のご指摘やアドバイスも多くもらえ、とても勉強になりました。

わたしは昨年に続き2回目の参加でしたが、この会が終わるときにはいつも、来年もまたここに来てもっといい発表ができるようになりたいという気持ちになります。私にとってこのシンポジオンは、自分を客観的に見つめなおし、ステップアップへのやる気を導いてくれる、とてもよい機会です。

都心に比べ、地方は学校数も少なくそれぞれが離れているためなかなか交流が生まれません。そんな中で開かれているこの貴重なシンポジオンに、多くの学生が参加することを期待します。今後は、こういう会で知り合った仲間と学校や地域を超えて一緒にプロジェクトをやってみたいです。(by 加藤智子)



富山大学b
チームの
語り合い

(3) 今回のシンポジオンに参加して、県内外の大学の方たちの作品を見て、とても勉強になりました。

本学の設計製図の授業ではクラス内のプレゼンだけで今回のように大勢の前で発表することがなく、とても緊張しました。その発表内容も全体としてまとまきれずに個々の発表となってしまう準備不足だったと思っています。その点、他のチームの発表はグループとしてのまとまりがあり、一人一人の発表しかしたことのない私たちにはとても勉強になりました。そして、自分たち以外の学校ではどのような勉強をし、建築に対してどのような思いがあるのかわかり、良い刺激になりました。

語り合いの時間では、他のチームの方々と意見を交換し合い、お互いの考えをぶつけ合いました。みなさんからは、私たち個々

の作品に対しての意見をいただくとともに、ネットワークということだから共通する部分があれば、また違う北口のネットワークができるといった指摘もいただきました。

シンポジオンに参加して、私達にはグループで何か一つのことに取り組むということが一度もなかっただけに、一度グループ内で意見をぶつけ合って取り組んでみたいとか、みんなで作品を作るのも楽しそうだったことが実感できました。また、みなさんと交流をもつことができ、これからはもっとがんばらなくてはという気にもなりました。シンポジオンに参加したことがとてもいい経験になりました。

そのほか、思ったことを列挙します。

- ・プレゼン技術も大事だけれども、発想が豊になるように、たくさんの方の建築をみて多くのことを吸収していきたいです。
- ・他の学生の方の作品を初めて身近に感じられました。みなさんの前で発表して、とてもいい経験になりました。
- ・自分たちの作った模型や設計に対して色々な意見をいただきました。今後の設計に役立てたいです。
- ・どのチームの作品も、しっかりとテーマに沿って真剣に考えてあり、なおかつ個性的な要素もいっぱいでした。
- ・福井大学の学生の作品がとてもすごいと思いました。紐で造られたイスやテーブル、布で造られたテーブルは、とてもきれいでした。

(by 片山成実、加藤三英子、鷹田健人、刀根愛子、松井渉、山岡俊宏)



富山建築・デザインチームの語り合い

(4) 「屋台プロジェクト」には大きく3つの意義があると感じています。つまり、(1)大学に隣接する雑木林(ぎつぼくりん)を地域の大切なレガシーとして活用していくための手段のひとつとして、新たな「食」の風景を描くこと、(2)実際に自らの手で実際にモノをつくること、(3)学年の枠を越えた創作活動を展開していくこと、の3つです。今回、プレゼンテーションでは参加者の方々に場所の臨場感を感じていただくため、あるいは学生の自主的な活動の意味を知っていただくために、「雑木林とは何か」「雑木林で活動する様々な主体」という根本的なところに時間をかけ説明させていただいた。それにも関わらず、参加者の多くの方には、持参した作品(編み椅子・編みテーブル・布のテーブル)のカタチや商品化に対する質問を投げかけていただいた。このことは、私たちの作品が、活動の意義や文脈を越えて、ひとつ(3つ)のモノとして人々を魅了するだけの力がある、のだとポジティブに捉えたいです。実際、多くの

参加者に「座ってもよいか」「触ってもよいか」と作品に大きな関心を抱いていただけたことは大きな自信になりました。我々は課外活動として創作をするための満足するような環境にはないですが、このシンポジオンに参加したことが、今後「屋台プロジェクト」を次なるフェーズに進めるための大きなモチベーションのひとつになっていることは間違いありません。(by 石原周太郎)



福井大学チームの語り合い

(5) 私達は、今回の「学生による語り合いのシンポジオン2009」に参加して成長できたと思います。

私がこのシンポジオンに参加しようと思ったきっかけは、研究室の先生から研究室を代表して発表してみないかと言われたことがきっかけでした。最初のうちは私もそこまで乗り気ではありませんでしたが、これを卒業研究につなげられるならやってみるかという安易な考えで引き受けてしまいました。しかし、実際は当日を迎えるまでにいろいろと難しく、大変なことばかりでした。

とくに、私達の研究室の発表は、一人でまとめたものではなく、研究生全員でまとめたものだったので、みんなの上で立つて指示を出すことの難しさを知りました。自分自身もどうすればよいのか分からない中で人に指示を出さなければいけないということが、自分がしっかりと理解していなければいけないという責任感につながりました。

又、発表の練習ではどう説明をすればいいのかわからない中で、先生にはダメだばかりで、どうして自分ばかりがこんなにも言われなくちゃいけないのだろうと思ったりもしました。

しかし、発表を終えた今となっては、研究から発表練習まで先生がしてくれた指摘は、自分が社会に出てから必要になることばかりで、それに気付かせてくれた先生に感謝したいです。そしてそのきっかけとなった「学生による語り合いのシンポジオン2009」に参加することができ、本当によかったと思っています。

発表を終えてみるとまだまだ自分達の伝えたいことがうまく伝えられないことや、発表するまでの予定計画など、不慣れな部分があったかと思いますが、これも一つのよい経験だったと思います。

又、他の人達の発表を聞き自分達では想像しないような地域の諸問題を対象とした活動が考えられていて、研究室だけでは学べないことも外に出て見て、会話することで学べた気がします。

発表当日、新潟県出身の他大学の学生とお話をさせていただき、新潟県中越沖地震のときに民家が大きな被害を受けたというお話をお聞きし、私たちは今回、制振ダンパー付き実大5層鉄骨造建物を仮想モデルとした「北信越地方における地震時の揺れの違い」について解析しましたが、ダンパー無しの民家をモデルとした解析も実施できたら良いと思いました。

学生たちが自ら声をかけ意見の交換を行える貴重な時間でした。

最後に、このような交流の場に参加できとても良かったです。(by 井口翔太、岡崎汐里、寺本翔史、中川泰一、森下儀一)



福井工大 a
チームの
プレゼン

(6) 私がこのシンポジオンを知る事になったきっかけは、同じチームのメンバーでもある一人の先輩の勧めでした。私は、このような発表の機会にあまり参加した事が無く、緊張と不安があったものの、自分を成長させるいい経験になるのではないかと思います。同じ研究室の友達に声をかけ、参加を決めました。

まず、私たちは、話し合いのテーマとして、学内の修士設計課題である「スポーツクラブを有するコミュニティ施設」に着目しました。内容は、福井市中心部から少し離れた住宅地にある福井市営三秀プールの改修です。これは、老朽化したスポーツ施設の改修であり、数々の諸問題に対し、私たちは、屋内型プールの設置、コミュニティ部門の設置、スポーツ部門の拡大、都市公園の再生の4つの付加価値を持たせることで、地域のコミュニティや問題を改善できるのではないかと考えました。ただ内容をまとめるだけでなく、内容をいかにわかりやすく聴講者に伝えるかを意識し、文章構成、写真や図面レイアウトなど話の流れが分かるように、シンプルなプレゼンテーションを目指しました。また、私はプレゼンテーションが苦手なので、実際に聴衆の前で何度も練習をしました。

当日は、北陸の大学5校、計9チームの発表が行なわれ、私も福井工業大学bチーム「カワシマケン」としてプレゼンテーションをしました。想像していた雰囲気とは違い、運営全体が学生主体で行なわれたせいか、とても話しやすい雰囲気でした。発表後の語り合いの時間に、「スポーツ部門だけのほうが面白い」や「スタッフの動線に問題がある」など、たくさんの指摘やアドバイスをいただき、大変参考になりました。また、「プレゼンテーションが分かりやすかった」と言ってくださる先生もおり、確かな手応えを感じ、これからの自信につながりました。

シンポジオンを終えて、全体を通して感じたことは、学生一人一人が自分の意見をしっかりと持ち、自分にはない発想や考え方ができるということと、学内だけにとどまらず、地域や、企業と提携して作っているなど、自分ではなかなか思いつかないようなことを行っていることに驚きました。同じ建築を学ぶ者として、参考にさせてもらうことがあり、とても刺激になりました。これからも、積極的に他大学の学生と交流し、情報交換しながら、広い視野を保って学問に励もうと思います。(by 三中一樹)



福井工大 b
チームの
語り合い

(7) 私たち CUBE ではこのシンポジオンに向けて改めて地域を見つめ、それについて調査・制作活動を行ってきました。私たち CUBE-A 班が進めてきた「社寺と地域コミュニティ」という視点(テーマ)に対し、他校の学生さんから投げかけられる素朴な疑問、親御さんが寺院の住職である学生さんからの意見、知識・情熱・発想豊かな先生方からの意見やアドバイス等々、学生間で話し合った中では出てこなかった内容のものが多くあり、感激しました。ひとつの作品を通して意見を交わしあう豊かさに改めて驚くばかりです。同時に、私たちのテーマにはまだまだ多く答の形が存在することに気付かされました。

そこで、私たち CUBE ではこのシンポジオン限りでこの活動を終了する予定でしたが、語り合いで得た成果をまた形にしたいと、今後もこの活動を続ける方針に転換しました。金沢工業大学内で発表の場を設け、活動の新たな発展を目指します。

今回の活動は、私を含めた3年生がおよそ中心となって行ってきました。来年も是非参加したいの思いがありますが、その3年生が来年もこのシンポジウムに参加することは難しいです。その思いも含め、現2年生には是非また参加してほしいと思いますし、何かを見つける気持ちで活動に励んでほしいと思います。仲間と真剣に意見を交わすことで学ぶ価値観、触れる個性、多くの人の前での発表と語り合い、普段の学生生活のなかでは体験しにくいものばかりです。他大学の取り組みや学校ごとの雰囲気の違いを楽しむのも非常に有意義なものでした。

最後に、このようなシンポジウムを開いていただいた富山大学の皆様に誠に感謝したいと思います。ありがとうございました。(by 中川達心)



金沢工大 a
チームの
語り合い

(8) 「それぞれのチームが目標として目指したもののや、その目標までに達した過程を聞くことは、自らの知識や創造力を深める良い時間だったと思います。思いや理想を形として表現するには、それぞれの進め方や考え方があって、それには王道は無いのだとそれぞれのチームの発表を聞いて思いました。また課外活動についての発表を聞くことで、他の大学でどのような活動が行われているのかを知ることができて、情報交換の場としてとても良かったです。そして発表後の自由時間には、学校や学年の壁を越えて、多くの他の学校の学生と発表に関する質問や感想を自由に述べたり、それぞれの建築についての考え方を話したりすることができて、発表を聞く以上に楽しい思い出になりました。また多くの教授から質問やアドバイスを頂くことで、よりいっそう自分たちの発表内容について、考えを深めることができたと思います。

都会とは異なり北陸地方には建築を学ぶ学校は少なく、他の建築を学ぶ学生と交流を深める機会はほとんどないように思います。しかし今回の活動で、他の建築学生と交流を深めることができたことは、非常に心地の良いものであり、また刺激を貰えた時間でした。そして学校の課題が多くて忙しいにもかかわらず、今回の発表に向けて一緒に取り組んでくれたチームの仲間に感謝したいです。(by 平野周)



金沢工大 b
チームの
まとめの
スピーチ

(9) 私たちC班は、A班やB班とは違い2年生と1年生で活動してきました。そのため、班を自分たちで運営しあのような場で発表することは初めての体験でした。シンポジオン当日まで不安でしたが、私たちが作ったものにたくさんの学生や先生方が質問、意見をくださったことに感動しました。また、そのような皆さんの、私たちの作品に対する感じ方に触れることで、建築を見ること、感じることの幅が広がったと思います。

他校の取り組みにおいて、企業と学生が共同に進めているプロジェクトはとても興味深かったです。学校という枠を超えて積極的な取り組みが行われていること自体知らず、何より学生が考えたものが実現されている事実は私たちにとってとても魅力的でした。

今回私たちが提案した作品をシンポジオンへ向けての活動だけで終わらせるのではなく、もっと実現性の高い作品を提案できるようにしていきたいと思いました。また、学生同士が語り合いの中で与え合った刺激は個々の良い経験になったと思います。他の学校の方々と同じ作品やプロジェクトについて論議できたことが 実に楽しく、交流も深まり有意義な時間でした。シンポジウムで体験したことを今後の学校生活に活かしていきたいです。

最後に、今回あのような場を提供して下さった富山大学の方々に感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。(by 千田加奈子)



金沢工大 c
チームの
スタンバイ

4. おわりに

今年のシンポジオンでは、司会者が学生とあって、学生主体が一段と鮮明となり、学内の講評会や学会の研究発表・デザイン発表とは一味も二味も違うものとなりました。こうした交流が学生諸君には、人間的な面でも貴重な糧となったように思えます。来年も、沢山の学生が集まり、大いに交流が成功することを望みます。

最後に、参加された学生諸君はいうにおよばず建築人の方々、有形無形にご支援いただいた学会役員各位にも感謝の意を表します。